シリーズ

いま、なぜ憲法改悪なのか パートⅡ

⑱「人権ないがしろ」が露呈！
～あり得ない内閣改造・自民党役員人事～

「明日の自由を守る若手弁護士の会」共同代表　黒澤いつき
公式ブログ　https://www.asuno-jiyuu.com/

9月から10月にかけて、岸田内閣や自民党の人事が大きく動きました。憲法や人権の観点からは、非常にゆゆしい人事だと言わざるを得ません。

1．相変わらず「男ばっかり」内閣

第2次岸田内閣は、閣僚19人中、女性が5名。これまでで最も多くなったと報じられていますが、男女半々にはほど遠い数字です。注目すべきは副大臣26人と政務官28人（併せて54人）の人事で、なんと女性の起用がありません。これはあまりにもジェンダーバランスを欠いた人事で、全体としてはむしろ男女平等は後退したといえます。松野官房長官は「多様性にも配慮し、適材適所の人事を行った」といいますが、これが適材適所なのであれば、まさに女性は政治には不要と言っているも同然です。

2．人権担当の首相補佐官が不在

今回の内閣改造で、海外にも衝撃を与えているのが、「人権担当」の首相補佐官がいなくなったことです。このポストは2年前、岸田首相自らが新設したものです。「人権」は国際社会ではキーワードとなりつつあり、特に「人権デューデリジェンス（人権DD）」は諸外国で法整備が進んでいます。つまり、「誰かの人権を侵害して作られた商品は買わない／労働者の人権を踏みにじって商品を作る企業とは取引しない」というルールで、資本主義と人権保障の両立を図る動きです（例：新疆ウイグル自治区での綿織物産業、カタールでのFIFAワールドカップ会場建設、ジャニー喜多川氏の性暴力など）。この世界の動きに日本も対応すべくガイドライン作りなどを進めていたのが、「人権担当」の首相秘書官だったのですが、今回欠員となったことで、法整備は頓挫してしまいました。人権を後回しにしている、と批判されても仕方ありません。

3．まさかの杉田水脈氏の起用

自民党の役員人事でも信じがたいことが起きました。杉田水脈議員が、党環境部会の会長代理に起用されたのです。杉田議員の（女性・外国人・LGBTQなどマイノリティに対する）数々の差別発言や侮蔑発言は、例えば「男女平等は反道徳の妄想である」あるいは「LGBTは生産性に欠ける」など、どれをとっても耐えがたいレベルのものです。同議員は昨年、岸田内閣の総務大臣政務官に「抜てき」されたものの、過去の差別発言が取り沙汰されて更迭されました。先月は同議員のアイヌ民族や朝鮮人に対する差別的・侮辱的なブログ投稿が札幌法務局から「人権侵犯」と認定されました。にもかかわらず、今回また党の役員に「抜てき」という重用されっぷりには、耳を疑いました。杉田議員はいまだにこれらの差別発言・暴言について真摯に謝罪していません。それでも同議員を重用することからは、岸田総裁と自民党が、いかに差別を容認し人権を軽視しているか、民主主義政治を担う資格のない価値観が浮かび上がります。

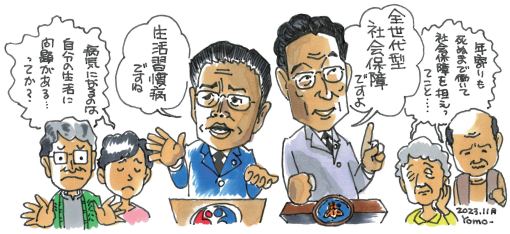
4．人権ないがしろの内閣と与党

岸田首相と与党自民党が人権保障をとことん「どうでもいい」マターと考える価値観であることは明らかです。選択的夫婦別姓の実現、同性婚法制化、日本学術会議への人事介入の検証など重大な人権課題に取り組める能力は期待できません。むしろこの感覚のまま憲法改正に意欲的な日本維新の会などの政党と手を組んで改憲に強硬に突き進む危険すらあります。食い止められるのは、「人権軽視を許さない」という私たちの市民の声と行動だけです。この声と行動で、人権軽視の政治を退場させましょう。

シリーズ

縮図からみる世界【66】

斎藤　貴男



名称変更「糖尿病」も「生活習慣病」も

「糖尿病」の名称が、英語と同じ「ダイアベティス（Diabetes）」に変更されるかもしれない。日本糖尿病学会と日本糖尿病協会が9月に公表した方針だ。理由は、①多くの患者らが現行の名称に抵抗を感じている、②科学的な疑問が生じている（尿に糖が混じらなくても発症する場合がある）――などだという。

私も血糖値には悩まされている当事者だ。嬉しくない病名なのは確かなので、変更も結構なことだとは思う。だが、「ダイアベティス」は勘弁していただけないか。

なぜって、アメリカの戦争への参戦さえ強いられかねない今の時代、病気まで彼ら色に染められたくないのが第一。だけでなく、現行名の「不潔なイメージ」を払拭したいとのことだが、そんな狙いは外れることが確実だから。

もう30年以上も前の話だが、こんなことがあった。東京・飯田橋にある「ブリティッシュ・カウンシル」（英政府による公的な文化交流機関）で英語を習っていて、留学先に決まっていたバーミンガム市について、英国人の先生に尋ねたところ――。

かの地の方言を、彼は教えてくれた。「ベトベトしたしゃべり方なんだ。この単語みたいに」と言って、「Diabetes。ベトベトべ…」と続けたのである。

実際に暮してみたバーミンガムでは、特にベトベトした口調を感じたことはなかったが（こちらの英語力が未熟だからか）。ネイティブにとっての「Diabetes」のイメージが、決して芳しいものではないことだけは間違いないと思われる。

「糖尿病」の悪印象は、名称のせいばかりではない。そんなことよりも重要なのは、「生活習慣病」という括り方であり、「教育入院」「療育指導」といった関連用語や、医療関係者たちの言動ではあるまいか。

何もかも患者自身の自己責任だ、という思い込みの圧が凄まじい。だから時折、「透析患者など殺してしまえ」などと言い出すバカが湧いてくるのだ。私もある医師に、「すべてあんたが悪いんだからな」と怒鳴りつけられた経験がある。熱心さのあまり、ではあったのかもしれないが、遺伝的要素を全否定できてしまう単細胞を信頼してあげられるほど、私は優しくない。

真っ先に改めるべき名称があるとすれば、それは「糖尿病」ではなく、「生活習慣病」である。専門家ならだれもが承知しているはずだ。小手先の情報操作でごまかさないでもらいたい。

斎藤　貴男（さいとう　たかお）

1958年東京生まれ。早稲田大学商学部卒。英国バーミンガム大学大学院修了。主な著書に『機会不平等』『戦争経済大国』『驕る権力、煽るメディア』『決定版　消費税のカラクリ』『いちばんたいせつなもの』『マイナンバーが日本を壊す』『マスゴミって言うな！』など。